

ACSB 中小企業研究アジア協議会第三回大会（マレーシアサラワク州ミリ市）参加記

JICSB 委員長 三井逸友

2015年10月26-30日、マレーシアサラワク州ミリ市で、ACSB 中小企業研究アジア協議会第三回大会が開催されました。

創立以来、韓国ソウル市での開催が続いたのち、3年目にしてアジア組織らしい場を得た観です。ミリ市はマレーシアでも本土ではなく、ボルネオ島の北部に位置して、目の前に南シナ海を望む古い商業都市でもあります。日本からは、クアラルンプールで乗り換え、さらに3時間以上の飛行という距離、シンガポールや隣のサバ州コタキナバル空港を経由して参加された人たちもいました。サラワク州やサバ州はマレーシア本土から離れていることもあり、独自志向が強く、「入国」には皆パスポートを出す必要があるほどです。

人口250万人のサラワク州の北端にあるミリ市は30万人を擁する大都市で、州都はクチンですが、ミリはブルネイ国に隣接し、石油や天然ガスなどの採掘も活発な経済中心地です。その中心市街にあるメリッツホテルが今回の会場になりました。このホテルは近年の建設で、ミリを代表する企業家であり、前年のACSB大会で最優秀企業家賞を受けたロバート・ラウ（ラウ・シウワイ劉紹慧）氏がオーナーです。同氏をはじめ、マレーシア政府、中小企業事業団、サラワク州政府、ミリ市などあがての開催と歓迎で、地元の熱の入れようがよくわかります。

赤道直下の熱帯の地ではありますが、開催期間中は天候にも恵まれ、雨に見舞われることもなく、快適な毎日でした。もちろんホテル内などはエアコン完備です。ホテルに隣接して大規模なショッピングセンターやデパートもあり、便利なことこの上もありません。メリッツホテルだけでなく、別の宿泊会場にも指定されたインペリアルホテルは徒歩10分ほどの距離で、こちらにも大規模なショッピングセンターやレストラン街などがあり、競い合っている観、さらに町を歩けば、チャイナタウンや市場などもあって、歴史ある商業都市だけのことはあり、至便です。郊外や海岸沿いには大規模なリゾートホテルやクラブなどもあるそうで、観光の町でもあります。

■サラワクでの産業ツアーと訪問

大会第一日、第二日は恒例の産業ツアーでした。今回私は下記の事情もあり、ACSB開催前から滞在をしていたので、ツアーにも初めて参加してみました。

10月26日のツアーは、バス二台を借り切って、市郊外の見学です。はじめに案内されたのは市内に近接するカントリークラブ、リングットクラブの名称のゴルフ場でありリゾート施設でもあります。そこで、特にボルネオの少数民族のひとたちの教育や経済活動支援のことが地元NGOから紹介され、説明とともに、民芸品の展示、子供たちの保育所訪問などが組まれておりました。また、ゴルフ場の一隅や拡張工事現場で、熱帯雨林の木の植樹のイベントが行われました。

クラブを出て、こんどはパーム椰子のプランテーション訪問です。行けども行けどもパーム椰子畑という広大な農園の一隅で、椰子の実の採取と運河の輸送船への積み込みの体験が持たれ、さらに椰子油製油工場を訪問し、昼食とともに、工場を見学しました。大理石粉末での酸性土中和化、有機肥料の利用をはじめとする天然資源活用や、廃棄物リサイクル利用、地元の人々の雇用など、「地域と地球に優しい」事業の展開が強調されていました。

そののちには、カーティン大学ミリ分校の訪問でした。同大学はオーストラリアパースに本校がありますが、この地に初めての高等教育機関として設置されたもので、美しいキャンパスで、本校同様の教育を実施する特徴を誇っています。インターネット回線での同時授業も行われています。ミリ市郊外のキャンパス周辺にはニュータウンの建設も進んでおり、暮らしやすさと修学費用の安さも売りということでした。

郊外のツアーののちには市内に戻り、夕刻の市役所でミリ市長への表敬訪問となりました。市議会議員も多くが同席するという歓迎ぶり、経済活動にも熱心なローレンス・ライ市長の姿が印象的で、早速翌朝のニュースになっていました。

第二日は、サマラジュの工業団地とビンツルの石油・LNG 精製所の訪問のツアーですが、私は参加しておりません。日本のエネルギー供給にも縁の深いところであったのでしょうか。ただ、参加者からは、とてもおもしろかったが、なにせ遠かった、帰着は午後 8 時過ぎという状況であったという話を聞きました。

いずこの地でも、こうした見学訪問等は、国外からの参加者には非常に貴重な機会です。学べることが多々あります。今回は、ビジネスマッチングなどのかたちはなかったものの、研究者以外の実務家、行政や諸団体関係者らにも良い経験になりましょう。

■ACSB 第三回大会

第三日、10 月 28 日はいよいよ開会式です。会場のメリッツホテル大ホールにはおおぜいが詰めかけました。国外からの参加者数は 20 カ国、190 人とその前の理事会で発表されていますので、マレーシア国内、またサラワク州内からの参加者は 1000 人近かったのではないかと思います。報道陣も多数待機しました。開会前から、全体会は始められ、「ASEAN2015」の経済共同体発足の意義が、MIT スローンスクールのチャールズ・ファイン教授、インドネシア、マレーシア、ミャンマーなどのゲストから指摘されました。

ただ、その後開会式の準備は整ったのに、いっこうに始まりません。壇上の主要ゲストも揃いながら、主賓の到着が遅れ、アトラクションの民族舞踊ダンサーたちを含め、みんな手持ちぶさたで待つばかりです。時間を持たせる意図か、全体会の中で次年度のジャカルタ開催を早々にアナウンスしてしまったインドネシアのヘルマワン・カルタジャヤ氏がこんどは延々と「講義」をはじめ、専門である中小企業のマーケティングの考え方を説く始末、正直参りました。

結局一時間近くの前延で、開会式はようやく始まりました。今回の大会の主役である、ICSB マレーシア支部たる ICSMEE マレーシア（マレーシア中小企業国際協議会）会長のタンスリ・アブドゥル・ラーマン・ママト氏、キム・キチャン ICSB 会長、マレーシア総理府ウィー・カ・シオン国務相、サラワク州元首のアブドゥル・タイブ・マフマド氏らを迎え、「国境を越えるアジア企業家精神」との今大会の開催の意義を強調し、相次いで演壇に立たれました。その実現、とりわけ一方での ASEAN 共同体とアジアの経済発展、他方でのエコシステムとイノベーション、持続可能性というキーワードは、マレーシア、またサラワクにとって欠かせないものだという点が繰り返し強調されました。そして、キム会長の持論たる「人間的な企業家精神」(Humanne entrepreneurship)の理念の国連への提案に、壇上で主催者、ICSB・ACSB 幹部および各国関係者らが署名するセレモニーも行われ、その画像は翌日の新聞のトップを飾りました。

「人間的な企業家精神」にはもちろん私も異存ありませんが、若干気になることは、キム・キチャン氏はこの言葉を、意識的に「社会的企業」(social entrepreneurship)に相對するものとして用いている点です。私の理解では、それには韓国において、研究者や行政関係者、実践家の間で、「社会企業家志向」と「企業家志向」とがかなり対立的な関係になっていることが絡んでいると言えそうです。韓国では2007年に「社会的企業育成法」が制定され、2011年には地域社会貢献や地方自治体の関与などを盛り込んで同法が改訂強化され、地域問題、雇用就労問題などに対する役割が重視されています。2014年の日本中小企業学会第34回全国大会(桜美林大学)では、金才賢キム・ジャェウン教授(建国大学校)に「韓国における社会的企業育成の背景と課題」を語って頂いています。けれども率直に申して、キム・キチャン氏らのKASBS韓国中小企業学会と、こうした社会的企業の研究者実践者たちの間には断絶がある観も否定できないのです。これに行政もそれぞれ深く絡んでいるので、なかなか一筋縄ではいきません。

開会式ののち、全体会の第二部、さらには各研究発表分科会が開かれました。また、実践家の会合も開かれ、いずれも翌日にまで続いています。いずれにあっても、マレーシア中小企業事業団のハフサ・ハシム氏や米国コネチカット大学のチャールズ・マシューズ教授(元ICSB会長)、韓国のキム・ヨンジン氏など、おなじみの面々が活躍をしています。

私にとって興味あったのは、開会式後の全体会が「アジア中小企業の持続可能性 事業承継計画と世代間企業家精神」と題され、日本で旬の課題である「事業承継」と「後継者」問題が正面から取り上げられたことでした。アジア各国でもこれは重要課題になりつつあることを示しています。ここでのスピーカーの最初に立ったのがICSB専務理事のエイマン・タラビシー氏であるのは象徴的でした。彼に言わせれば、研究者としての自分の専門は「家族経営」であり、自身がそうした背景の出でもあるというわけです。主にはアメリカでの経験からであるものの、家族経営でも事業承継は容易なことではなく、早期の計画立案と実践が欠かせない、もちろん事業の売却や統合などさまざまな選択肢もあるが、重要なのは後継者を含めた人材への積極投資とスキル、知識の向上であると、タラビシー氏は語っていました。この内容は、翌日の地元英字紙『ボルネオポスト』に、ACSB開会式およびASEAN共同体対応の記事と並んで大きく取り上げられていたので、相当の関心を呼んだものと思われまます。同氏ののちには、マレーシア国際中小企業協議会のジョフ・アンドリュウ氏、ミリ企業家協会のロバート・ラウ氏、オーストラリア競争・消費者問題委員会のマイケルシェーパー氏、インドネシアのマーケットプラス社のCOOジャッキーマッスリー氏がそれぞれ、経験などを踏まえた発言をしました。せつかくの重要課題なので、もっとじっくり経験や意見を聞きたかったところです。

なお、あとでも記しますが、開会式のみならず、各会合関係での日程の開催時間のずれ、予定変更はざらで、かなり戸惑わせるところでした。会場が基本的にメリッツホテルの同じフロアであったので、駆け回ることは容易ではあったものの、ともかく予定時間の厳守とか、変更の告知とかにあまり気を遣わない、それがマレーシア流なのでしょうか。「裏方」を努めたザカリア・タイブ氏など本当に大変であったと思うのに、あまり顔色変えることもなく悠々としている、そこなのでしょう(全部終わった30日の昼、私がホテル内のマッサージに行っていたら、同氏もやってこられました)。

■アカデミックセッションと日本の貢献

今回の大会では、アカデミックセッション分科会の日程やプログラムの詳細が容易に決まらず、発表されず、発表者自身を相当にいらつかせたようで、全体の運営のみならず、個々にも課題を残しました。

受付に問い合わせれば、そういった資料は発表者にしか出していないなどと言われる始末。それが 28 日の朝になると、なんと各セッションのプログラム詳細と発表のサマリーが載った豪華プログラムが用意され、配布されたのです。遅ればせながらも、それは良かったのですが、参ったのは、各発表のフルペーパーを入手することができない事態でした。輪をかける問題です。研究発表は、それぞれの人の研究成果であるペーパーを広く公開する意味もあるはずですが、これもどうやら、要求をした発表者には大会事務局が「手づくりした」CD を渡したらしい、しかし私は入手することができませんでした。分科会の編成が偏っており、日本からの参加者の発表がいくつも同時刻に重なっていたのも残念なことですが、これはなんとも言いようもないかも知れません。

そうした問題や困難を超え、日本からの参加者は、それぞれ良い発表をされました。

今回参加して研究発表をされたのは、加藤敦氏（同志社女子大学、ICSB 副委員長）・三宅えり子氏（同志社女子大学）「女性の社会企業家の起業への挑戦」、同「日本における母性と企業家精神の結合」、大内寛子氏（神戸大学大学院生）「ベトナムにおける中間管理職の問題」、弘中史子氏（滋賀大学）「中小企業の多国間海外生産」、山本聡氏（東京経済大学）「日本の金属加工中小企業におけるエフェクチュエーションと顧客獲得」、原田優花子氏（名古屋工業大学学生）・小竹暢隆氏（名古屋工業大学）「木質バイオマス活用への地域ネットワーク」、寺門麻由利氏（名古屋工業大学院生）ほか（仁科健氏、石井成氏共著）「フードデザート問題対応の事例研究」、ビクター・ペレス・センテノ氏（神戸大学）「企業家の頭脳を探る」、という 8 本です。分科会研究発表がのべ 30 本でしたので、その 1/4 以上を占めることになり、ここでのプレゼンスは顕著でした。

特筆されるのは、このうちで寺門氏らの発表がベストペーパー賞を受賞したことです。第 1 回 ACSB 大会で岡室博之氏が受賞しておりますので、初めてではありませんが、日本の若手の研究成果の存在を大いに知らしめたと申せましょう。全体としても、若手の人たちの発表が目立ちました。地元カーティン大学の人たちもいました。

今回の ACSB 第三回大会には、これらの発表者のほか、岡室博之氏（一橋大学、JICSB 副委員長・ACSB 副会長）、山田真氏（名古屋工業大学院生）・伊藤健太郎氏（名古屋工業大学大学生）、および三井が参加しました。合計しますと 13 名で、遠地での開催でありながら、日本の貢献は決して小さくなく、とりわけ若手の参加と活躍が目立ったことは特記されましょう。山田氏と伊藤氏は ACSB Young Entrepreneurship Camp(50 人近くが参加)にも参加され、貴重な経験をされました。これに関しては、別途「参加記」を頂いています。「教育」活動に力が入っている最近の ICSB、ACSB の流れからすれば、日本の若手の方々がこうした機会を活用されるための、良き手引きとも言えましょう。

■ガラディナー

本大会の日程が実質 2 日と短いこともあり、28 日夜にはもうガラディナーが開かれました。メリッツホテルのボールルームで、かなり着飾った方々が多数詰めかけます。参加者同士でも早速に名刺交換や交流、歓談が始まります。ディナーの料理は相当に豪華、同ホテル内の中華料理店のフルコースが出てきました。もう食べきれないくらいの量で、魚介類や肉類、野菜など実に豊富です。ただし、アルコールは一切なく、甘いソフトドリンクがいくらかでも注がれるのは少々参ります。私には、25 日夜の ICSB、ISBC 交流の晩餐会とほとんど同じ料理であったのもいささかでしたが。

アトラクションは民族舞踊と音楽ですが、これが相当に賑やかかつ躍動的で、6 月のドバイ ICSB の時

とはえらい違いです。まばゆい光と、大音量の音楽と、会場いっぱいに広がる踊りは、ボルネオ島の少数民族の伝統なども取り込みながら、いまのマレーシアの文化と皆の関心を象徴しているのでしょう。そして終わり近くなると、参加者も巻き込んだ一大ディスコパーティとなりました。朝から夜までのハードスケジュールにもめげず、皆さん本当にお元気でした。

■ACSB 理事会

28日の大会開会に先立ち、ホテル内で ACSB 理事会が開かれ、日本委員会からは岡室副委員長と私が参加し、加藤副委員長が陪席しました。ACSB 会長にはあらためて、マレーシアのザカリア・タイブ氏が推薦され、同氏もこれを受諾しました。また、次年度大会に関してインドネシア（代表ヘルマワン・カルタジャヤ氏）からのプロポーザルがあり、理事会として大歓迎となりました。インドネシアはえらく手回しが良く、大会開会から次年度大会の紹介と歓迎のメッセージが投影されるほどでした。したがって、いまして ACSB 第4回大会は、2016年9月13～15日、ジャカルタで開催されます。これにはインドネシア政府、マーケティング協会などが全面支援します。

理事会の議論の焦点となったのは、新たな参加組織のかたちでした。前回から議題に上っていた ASEAN 組織の結成の件で、今後 ICSB、ACSB の活動への参加を希望しているタイ、カンボジア、ベトナム、ミャンマー等を傘下におさめる新組織づくりという方向と、マレーシアはじめ ASCB の主要メンバーとしてすでに活発に動いている ASEAN 諸国各組織との関係、将来の各国の個別加盟という方向との整合性に議論が集まりました。結論としては、緩やかなかたちでの ICSB-ASEAN をつくり、ACSB メンバーとし、将来は各国の個別組織づくりと加盟という方向に向かうことが確認されました。あわせて、来年の ICSB 米国大会、国連との連携でのイベント（2016年6月15日）等が紹介され、特に ICSB アカデミーの強化がキム会長から要請されました。

ICSB-ASEAN の発足、ACSB 加盟はガラディナーの場で披露され、あらためて各国参加団体の同意署名の儀式ももたれました（私は漢字でサインしておきました）。ASEAN 統合と共同体発足を前にしてのこの大会で発足、という実に象徴的な意味を与えられた観は如実です。

理事会の終わり近くに、韓国のキム・ヨンジン氏から、日本の IT 関係の団体から ACSB への協力の要請があるという紹介があり、当方としてはいささか面食らいました。まったく耳にしていない件だったからです。慌てて調べますと、京都に本部を置く、全国地域情報産業団体連合会（ANIA）という団体のことで、来日していたキム氏との接触があり、そういった話が出たようなのです。これについては、日本委員会としてまず調査、コンタクトをするとして引き取らせてもらいました。

■ISBC 国際運営委員会

実は、ACSB 大会に先立ち、おなじみ市メリッツホテルで、ISBC 国際中小企業会議の国際運営委員会が開催されたのです。もちろんこれは偶然のことではなく、ホストとしてのマレーシア中小企業事業団のアレンジによるものです。

私は、この ISBC の日本組織である ISBCJ 日本中小企業国際協議会の議長でもあるので、この機会を生かし、ISBC 国際運営委員会にもオブザーバー参加しました。ISBCJ の事務局である中小企業基盤整備機構の新保国際交流課長、ISBCJ 理事長であり、ISBC 名誉顧問、もと国際専務理事を務められた井出氏が日本を代表して参加をしました。

はっきり申して、ISBC はかなり困難な状況にあります。ここ数年、大きな国際大会も開かれておりません。かつて ISBC は政府、産業界などの国際交流連携の場として、世界各地で大規模な大会を重ねてきたのですが、特に北米や欧州でのプレゼンスの低下が顕著であり、ISBC 国際専務理事を務めてきた井出氏の退任、カナダへの事務局移転後、うまく回っていないことが顕著になってしまっています。

こうした現状を打開したいと、昨年来、英国のクリスチャン・リスター氏（X-プレス法務サービス社専務、ジェネシスイニシアチブ代表）が名乗りを上げました。国際事務局を委ねてほしい、それで ISBC の活動を再活性化させたいという提案です。

今回の運営委員会では、リスター氏が自分のプランを詳細に説明し、そして長年にわたり、ISBC と ICSB の橋渡し役を務めてこられた、ケン・オニール氏（アルスター大学名誉教授）が熱弁をふるって、このプランの必要性を説きました。つまり、この英国のお二人が、ISBC 再生の主役として名乗り出たのです。

リスター氏の計画は、曖昧であった国際事務局の役割を明確にし、独立の常設機関として、積極的な事業活動を展開する、そしてこれをてこに、新たな参加組織も募り、基盤を固め、2年後の国際大会開催を目指すというものです。もちろんあくまで、会長副会長および国際運営委員会の監督のもとであり、また新たに設立される ISBC Global Limited は、非営利の法人となる、こうした条件付でした。

運営委員会参加者も、この方向にしか ISBC 存続の道はないだろうという点は同意、日本協議会も原則賛成という立場で臨みました。私は、リスター氏の「勇気ある選択」に敬意を表しながらも、この計画で財源は大丈夫なのか、事務局運営等の出費は決まっていて、歳入が不確定ではまずいのではないかとただしました。現在の参加組織からの新たな会費等とはとらない、新事務局の当面の費用財源はリスター氏個人からの借入というかたちにする、期待は新加盟組織からの入会金収入だということです。これに対し、リスター氏やオニール氏は、彼の事業家としての経験と手腕を信じてほしいというので、私にはいささか疑問の残る落としどころでした。

なお、ISBC の新会長には區宗傑スタンリー・アウ氏（昨年の拡大運営委員会主催のマカオ組織代表、デルタアジアファイナンシャルグループ会長）が推薦され、副会長には台湾の張大為デビッド・タウエイチャン氏（中華信用情報サービス社社長）が就任しました。アウ新会長は ICSB との連携にも意欲的で、同夜の ICSB/ACSB との晩餐会ははじめ、ACSB 全日程にも参加し、常に先頭に立って、国際交流の推進に努めておられました。一方で井出氏は ISBC 名誉顧問からも退かれることを表明されました。

ISBC と ICSB とが、それぞれの役割を果たしながら、国際的な機会として連携協力していくことは望ましいでしょう。これまでも、「相乗り」のかたちになった機会は幾度かあります。2011年のストックホルム大会がそうでした。オニール氏や井出氏らは両方の機会に参加してきました。

ただ、長年の歴史をそれぞれ重ねてきていけば、そうことは簡単でもありません。タラビシーICSB 専務理事が紹介していたように、元来 ICSB は研究・教育関係中心、ISBC は行政・実業界中心でしたが、前者が行政や実業界を巻き込み、大規模な世界大会を開くようになって、「役割分担」はだんだん見えにくくなり、ISBC は組織自体が弱体化してきています。今回、ISBC 国際運営委員会終了後、メリッツホテル内中華料理店で、マレーシア中小企業事業団の招待による双方参加の晩餐会が和やかに開かれ、今後の協力の方向が見えてきたようにも思われました。しかし、3日後の ACSB 理事会の際には、タラビシー氏は「ISBC は営利企業になった」「非営利組織である ICSB は一緒にはやれない」と発言、私はそれは事実認識自体違うと反論し、のちには採択された ISBC の事業計画を引用して、彼に指摘をしました。

けれども、先のドバイ ICSB の際にもそうでしたが、タラビシーら ICSB 関係者には ISBC への不信感が根強いようで、ことは容易にすすみがたいのもぬぐえません。

すでにたびたび指摘してきたように、日本にあっては、ISBC の設立と運営に深く関わってきた歴史があり、中小企業基盤整備機構などの行政関係や全国中小企業団体中央会、商工中金などがこれを支えてきています。それだけに、ISBC の「迷走」は、日本サイドには混乱を及ぼしています。逆に、学界中心で再結成された ICSB 日本支部である JICSB には、ICSB、ACSB サイドから求められる課題は重い観もあります。今回の ACSB 理事会の際にも、あらためて JICSB の課題は指摘されました。会員の拡大増強、国際的な取り組みへのいっそうの関与、そして ACSB 大会を近い将来開く可能性の 3 点です。これらの課題への取り組みの前進には、先のドバイ ICSB の際の理事会で私も約束してきたように、日本国内での ICSB と ISBC、JICSB と ISBCJ などのあいだの関係整理、新たな関係構築が必要なのです。

今回、同じミリで開催された ACSB 大会と ISBC 国際運営委員会、そして私の双方への参加は、僅かずつでもこの課題への取り組みの前進を示すものと、自負したいところです。実際には、日本での組織的な体制と取り組みの展望は容易に見えては来ないのですが。

皆様のいっそうのご理解とご協力とともに、お知恵の頂けることを願っております。

■個人的な印象と、今後への課題と

最後に、今回の ACSB 第 3 回ミリ大会の個人的な印象を記しましょう。

実は、この機会に参ったのには、まったく個人的な理由もあります。ボルネオ島を訪れたいという思いです。それに関しては、ここで詳細を記すのは憚れますが、要は、17 年前に他界した亡父の非常な戦時体験、そこから続く 70 年前からの思いを代わりに果たせた、ということになります。

これに関しては、ザカリア・タイブ氏ら現地サイドの方々も理解してくれました。そこには感謝の思いがあります。けれども、ICSB 日本支部組織に関わる立場からすれば、せっかく遠路多くの方々が日本から参加され、特に若手の活躍が目立った今次大会に関し、その運営の方では疑問を覚えるところが多々あったと言わざるを得ません。

プログラムの確定の遅さ、その場になっての変更の多さ、情報不足、そして信じがたいような予定キャンセルなどはいかかなものかと思われまます。夜のプログラムは大半ありませんでした。極めつきは、29 日夕刻の「閉会」はセレモニーもなく、「終了」してしまっただけです。実務家会合と分科会がそれぞれもたれ、それらが終わったらはいおしまいで、拍子抜けもいところ、この大会全体が何であったのか、まとめはあるべきものではないのでしょうか。開会式を嚆矢として、時間を守らないこと日常化していたのに、「終わり」だけはプログラムよりずっと早くにさっさとでした。

それとともに、政府や行政機関関係者、政治家らの「演説」があまりに多く、長いのも興をそぎました。28 日版のガラディナー席上での、サラワク州首相の演説の長さには、出席者全体から「まだ終わらないのか」という嘆息といらだちが顕著にうかがわれるほどでした。なにしろその間、料理を運ぶのもストップ、それもあって、明らかにパーティの時間不足、フルコース配りきれなくなったのですから。

もちろん、この大会を開くために、マレーシア政府、中小企業事業団、サラワク州政府などの大変な熱の入れよう、ヒトモノカネの投入ぶりは明らかなので、それにふさわしい機会、行政や諸方面の活動や今後の施策の紹介など十分に示したい、語りたいたいという意図はわかります。実際、新たな予算措置などをはじめ、これらの演説は早速に翌日の地元紙『ボルネオポスト』などに詳しく掲載されています。

しかし、これはあくまで「国際会議」なのです。「内向き」の対応ばかりを考えられては、遠路参加した他国からの参加者には、いささか迷惑なのではないでしょうか。

このことは、三回目を迎えた **ACSB** の今後の大会のあり方にも、教訓と課題を残していると思われる。行政界や諸団体、政治家らの発言や紹介が無意味というわけではありません。ただ、それらはあくまで、世界各国からの参加者にも意義があり、良い教訓や示唆を与えてくれるものであってほしいと思います。今回、**ICSB** 大会やソウルでの二回の **ACSB** 大会のような、「政策フォーラム」というような場もなかったのは、その意味でも全体構成のバランスを失した結果になってしまったのではないのでしょうか。

これとは対照的な印象であったのは、開会式の流れて、ロバート・ラウ・シウワイ（劉紹慧）氏の行った歓迎演説でした。前記のようにミリの成功した企業家であり、当メリッツホテルのオーナー、今回大会開催の陰の立役者とも言える同氏は、高齢のうえに体調も良くない、出席できるかなどという噂も事前に耳にしていたのですが、どうしてどうして、達者な演説を、自分の多年の事業経験、ミリの発展などの事実を交えながら、淡々と語り、文字通り裸一貫から身を起こし、地域のために大きな仕事を成し遂げた人柄がにじみ出た、本当に聞くに値するスピーチでした。

翌晩の、ガラディナーが「当然のように」アルコール抜きでもあったので、終わるや日本のみならずかなりの外国参加者が、最上階の展望レストランの外、屋上にあるバーに向かいました。心地よい夜風を受けながら一杯、というところに、なんと同氏が待っていたのです。肩肘張らず、気軽にミリの印象や同氏の日本訪問記など語り合い、また記念写真を撮り合って、本当に和やかでよい晩となりました、国際会議の醍醐味が、ここに集約されていたと実感できました。

ACSB のあり方も、まだまだ試行錯誤であると思います。こうした大きなイベントを開く以上、「純粹」学会的なあり方だけを求めるのも無理がありましよう。言うまでもなく、開催関係者のご苦勞は大変なもので、ひたすら感謝あるのみです。けれども、参加者みなに、「行って良かった」「収穫があった」と実感できるものであってほしいと望まずにはられません。もちろんそれは、今後の日本サイドの課題でもあるわけです。

最後になりましたが、**ICSB**、**ACSB** への関与参加をはじめ **JICSB** 第一期を支えられた役員の方々、とりわけ今期で交代をされた井出亜夫氏、張淑梅氏には、ご協力ご貢献にあらためて感謝を申し上げたいと思います。

注) 事務局注記

山田真さんと伊藤健太郎さん（共に名古屋工業大学小竹研究室）が **ACSB Young Entrepreneurship Camp(YEC)EC** に参加しました。伊藤健太郎さんの報告記です。

<https://app.box.com/s/ldo1qm2qlh3gb9x5zplc3a450ftnmzx4>

なお名古屋工業大学からは小竹先生の他、発表者とあわせ、大学院生 2 名（寺門麻由利さん、山田真さん）、学生 2 名（原田優花子さん、伊藤健太郎さん）が **ACSB** に参加したことになります。